市政ニュース

城崎国際アートセンタープレ事業「地域文化フォーラム」「ダンサーを探せ!! in 城崎温泉」を開催

9月22日、城崎国際アートセンタープレ事業「地域文化フォーラム―アーティスト・イン・レジデンスと『小さな世界都市』」を豊岡市民プラザで開催しました。第1部は、前文化庁長官　近藤誠一さんの基調講演、第2部は、パネルディスカッションを行いました。

近藤さんは「富士山は芸術の源泉。文化遺産として世界遺産に登録された。外国の方の日本理解に最も効果的なのは来てもらうことであり、城崎国際アートセンターなどが行うアーティスト・イン・レジデンス（芸術家がまちに滞在しながら新しい作品をつくる活動とその活動を支援する制度）の果たす役割は大きい」と語りました。

第2部のパネルディスカッションでは、「舞台芸術系のアーティスト・イン・レジデンスでは、城崎国際アートセンターは国内で最大規模。温泉があることも強み」「海外アーティストは、帰国後、作品を発表する。城崎も紹介され、成果がフィードバックされる」などと語られました。また、劇作家の平田オリザさんは、フランスのノルマンディ演劇祭の作品を城崎で初演すると話しました。

さらに、同日午後5時からと午後8時からの2回、城崎温泉のさまざまなロケーションで「ダンサーを探せ!! in 城崎温泉」を開催しました。

当日は、プロダンサーと但馬地域から集まった「紛れダンサー」の87人が出演し、観光客ら約千人が参加しました。

▲城崎温泉街のあちこちにダンサーの姿

～必要な支援を迅速に行う～ 台風18号の被災地・福知山市に災害派遣

9月15日から16日にかけて日本を縦断した台風18号は、京都府を中心に、日本列島に甚大な被害をもたらしました。

市では、隣接する福知山市や由良川流域の災害支援を検討するため、17日に本市職員を現地に送り、被害状況調査を行いました。その結果を受けて、福知山市に災害支援を申し出ました。

同日、福知山市から災害派遣要請を受け、翌18日から市職員を派遣しました。現地では、災害廃棄物を、重機や人力で分別しながらダンプカーに積み込み、福知山市から指定された災害廃棄物仮置き場に運搬する作業を行いました。

支援は23日まで実施し、延べ66人の職員を派遣しました。

災害が発生した直後、当該自治体には種々の支援を要請する余裕はありません。本市は、平成16年の台風23号の経験により、こちらから迅速に災害派遣をし、支援することとしています。

▲福知山市で災害廃棄物の収集作業を行う本市派遣職員

新たに任命された教育委員

9月26日、市議会定例会で同意を得て、豊岡市教育委員会委員を任命しました。

委員の任期は、前任者の残任期間（平成29年5月16日まで）です。

▲宮嶋珠美（みやじまたまみ）

（敬称略）

～主な市政の動き～

【9月】

16日・豊岡市（城崎地域、但東地域）災害警戒本部設置・同日廃止

18日・福知山市へ災害派遣（～23日）

25日・国民体育大会・全国障害者スポーツ大会、本市出身選手激励会・報告会

・東京大学豊岡実習（～28日）

27日・第1回市立森本中学校統合検討委員会

28日・韓国・環境財団「子ども環境センター」来訪

30日・日本劇作家大会2014豊岡大会実行委員会設立

【10月】

2日・新庁舎竣工記念イベント募集（～24日）

3日・戦没者追悼式

4日・第1回コウノトリ野生復帰検証委員会

・2013モンゴル国研修生来訪（～9日）

7日・コウノトリ但馬空港地場ソーラー安全祈願祭

9日・国道482号鶴岡橋開通式

・京丹後市・豊岡市合同会議

～豊岡を世界へアピール～
東京で開催されたJATA旅博2013に参加

市は、外国人観光客誘致を重点事業としています。その一環として、国内外の旅行業界関係者が一堂に会する「JATA旅博2013」（9月12日～15日）に参加しました。

旅博では、兵庫ツーリズム協会や姫路市、明石市と共同出展して本市をPRしました。また、12の国・地域（アメリカ・カナダ・イギリス・フランス・ドイツ・オランダ・イタリア・スペイン・シンガポール・マレーシア・香港・中国）と商談を行い、城崎温泉など豊岡市の商品価値は高く評価されました。

メディア関連会社には、城崎温泉の魅力や本市のインバウンドの取組み情報を発信し、今後も情報提供することとしています。

市のマスコット「玄さん」もステージイベントに出演し、本市をアピールしました。

▲会場で豊岡を広くPR

～城崎国際アートセンター、出石永楽館、豊岡市民プラザなどが会場に～
日本劇作家大会実行委員会設立

9月30日、平成26年6月に開催する「日本劇作家大会2014豊岡大会」の実行委員会を設立しました。

日本劇作家大会とは、劇作家をはじめ、俳優や演出家などの演劇人、映画・テレビのジャンルからもゲストを迎えて、シンポジウム・ワークショップ・講座・リーディングやパフォーマンスなどを中心とする市民参加型イベントです。

会期中は、劇作や舞台芸術に関するテーマを扱いながら、市内外の幅広い年齢層の方が参加できる企画が数多く展開される予定です。

実行委員会は、日本劇作家協会や兵庫県、地元団体代表者、市などで構成しています。

実行委員長に就任した中貝市長は、「芸術文化の可能性は、人々の心に直接働きかけるということ、制作者・演技者が表現する過程を通して生きる力を得られること、まちが元気になることにある。まちを挙げて芸術家を応援し、滞在した芸術家が各地で活躍することで、また、まちが元気になる」と大会への期待を語りました。

また、副委員長の日本劇作家協会会長の坂手洋二さんは、「コウノトリの話がおもしろいのは、それが歴史・人とつながり、豊岡が何をつくっているのかにつながっているからである。滞在型の演劇祭にはさまざまな可能性がある。豊岡も日本に例がないようなことを示せる場になればよい」と話しました。

中貝市長の徒然日記 72
命への共感

10月3日、戦没者追悼式がありました。

あの戦争で4089人の豊岡出身者が兵士として異国の地で命を落とされました。戦争が終わってから68年。人は忘れる生き物であり、忘却は苦しみを和らげてくれます。しかし。

一昨年の大災害の被災地から一貫して伝わってくるメッセージは、「どうか私たちを忘れないでほしい」というものです。諸霊やご遺族からも、同じお気持ちが伝わってくるような気がしました。

数百万人のユダヤ人を強制収容所へ送ったナチス・ドイツのアイヒマンが語ったとされる言葉。「一人の死は悲劇だが、集団の死は統計上の数字に過ぎない」。

戦慄を覚えます。戦没者は、統計ではありません。そのお一人お一人に名前があり、お一人お一人に人生がありました。そのことに命への共感を持って思いを寄せること。昨年制定した「いのちへの共感に満ちたまちづくり条例」が進めようとしているのは、まさにそのようなことです。

1994年初夏、野生のコウノトリを探すシベリアへの旅の終わりに、ハバロフスク郊外にある日本人墓地を訪ねたことがあります。

故郷や家族から遠く切り離されて、ロシア極東の片隅でさわさわと揺れる木々の下にひっそりと眠る人々。一人一人の名前が刻み込まれた墓。そして、今なお名前の記されていない墓石。花を手にその前に立ったときの、あの凍りついた瞬間を私は忘れることができません。

私の長女は、鳥取の病院で生まれました。逆子と破水が重なり、真夜中、ひょっとしたらだめかもしれないという知らせに、私の両親、4歳の長男と一緒に豊岡から走りました。着くと、医師が状況を妻の両親に説明していました。「結論を教えてください！」と叫ぶ私に、「無事に生まれた」という声。へなへなとしたことをなぜか思い出します。